



# 教皇様の敵

世界若者の日に寄せて

## 生命を排斥する風潮が

### 広がっている

(…) 教皇は「命」について何を語るつもりなのかと皆さんはお尋ねになるでしょう。

私の答えは、初代教皇ペトロの信仰告白と同じです。私のメッセージは初めから受け継がれてきたものに他なりません。それは私のものでなく、イエズス・キリストご自身の「良い知らせ」そのものだからです。

新約聖書には、イエズスがペトロすなわち岩と呼んだシモンの姿が、情熱的で疲れを知らぬキリストの弟子として描かれています。けれども彼とて疑いを抱き、重大な瞬間に、キリストの弟子であることを否定しさえしたのです。そうした人間的な弱さにも拘わらず、ペトロは師に対する完全な信仰告白を公にした、最初の弟子でした。



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1993 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL 0797-31-3452・FAX 0797-31-3448

ある日、イエズスが「あなたたちは私を誰だと思おうのか」とお尋ねになると、ペトロは「あなたはキリスト、生ける神の子です。」(マテオ16・16)と答えます。

ペトロに始まり、使徒たち、老若男女を問わず地上のあらゆる人が、真の神・真の人、人類の贖い主、歴史の主、平和の君であるイエズス・キリストへの信仰を証し、宣言しています。ペトロのように、彼らも「主よ、だれの所に行きましょう。あなたは永遠の生命のことは有しておられます」(ヨハネ6・68)と言うのです。

今日、私たちも同じ信仰を公にします。私たちはイエズス・キリストが生命の言葉を有し、それを教会に語り、キリストへの信仰と信頼をもって心を開く全ての人々に語られることを信じます。

「私は良い牧者で、良い牧者は羊のために自分の命を捨てる。」(ヨハネ10・11) ヨハネ福音書のこの言葉から、黙想を始めましょう。

良い牧者は、命を捨てる。死が生命を攻撃する。人間の経験するレベルでは、死は命の敵です。私たちの自然な生への望みをくじく侵入者です。それは時ならぬ死や変死、何よりも罪なき人々の殺害の場合、特に明らかです。

生命の主、契約の神がシナイ山で命じた十戒の中に「殺すな」(脱出の書20・13、マテオ5・21 参照)があるのは当然でしょう。「殺してはならない」は契約の板、すなわち掟の石板に刻み込まれていました。しかしそれ以前にも、この掟は人間の心に、各人の良心という聖域に彫り込まれていたのです。聖書によれば、この掟を破ったのは弟を殺害したカインが最初です。この恐ろしい罪を犯した直後、彼は殺すなという掟を破った責めを負いました。「私は弟の番人ではありません」(創世

「聖なるロザリオ」(改訂新版) ホセマリア・エスクリバー著

ロザリオの祈りを再発見したい人のためにお勧めします。

定価 一三三六円 一三〇〇円

4・9)と言って、事実を隠そうとしたにも拘わらず、内なる声が繰り返す。「お前は人殺しだ」と告げたのです。それは彼の良心の声であり、黙らせるわけにはいきませんでした。

時と共に、命を脅かすものはますます巨大化こそすれ、弱まることはありませんでした。外から来るものばかりではありません。自然の力、あるいは「アベル」を殺す「カイン」のようなものだけでなく、科学を用いて組織的にもくろまれた脅威もあるのです。二〇世紀は生命に対する巨大な攻撃と、果てしなく続く戦争の時代です。絶えず罪なき者の命が奪い去られています。偽りの預言者と教師たちが、めざましい成功をおさめたのです。

同様に、誤った進歩の理想が地球上の生態バランスを脅かしています。創造主の似姿として造られた人間には、自らの存在と生命を取り巻く環境を守るべき、良い牧者としての使命があります。それは大昔に与えられた仕事であり、人類はその歴史を通じておむねうまく果してきたようですが、近代に至って、人間自身が自然環境の破壊者となってしまいました。

あちこちで今も自然破壊が続いています。しかしそれだけではありませ

ん。生命を排斥する考え方が広まり、母親の胎内にある生命と、生涯の最後を目前にした生命に敵対する傾向が広まっているのを私たちは目のあたりにしています。科学と医学が、健康と生命の安全を確たるものとしつつあるその時に、生命に対する脅威はいよいよ容易ならざるものになっていきます。墮胎と安楽死(いずれも殺人に他なりません)は「権利」であり、個人的・社会的な「問題」の解決策であるとされているのです。罪なき者の殺害は、邪悪と言うにとどまらず、破滅的です。法にのっとり、科学を応用して行われているからです。現代の大都市では、神からの最初の賜であり各個人の基本的な権利、他のあらゆる権利の基となる生命そのものが、多かれ少なかれ商品のように思いのままに売買され、操作される恐れがあります。

キリストは命を保つようお望みになるのに、こういうことが起っているのです。主は命を脅かすものをご存じです。羊をさらう、散らす、狼のことをご存じです。羊の囲いに入ろうとする盗人や雇い人(ヨハネ10・1、13参照)のことをご存じです。いかに多くの若者が人生を無為に過ごし、責任を逃れ、偽りの内に生きているかをご存じです。麻薬、アルコールの

乱用、ポルノ、性の無秩序、暴力。これらはあらゆる国で、また国際レベルで、社会全体が真剣に取り組まねばならない問題です。しかし、それらは個人的な悲劇でもありません。必要なのは具体的な人と人との間の愛と連帯の行為です。それも各人が神と他の人々と、自らの良心に対して負っている重い責任を、再び自覚した上でなければなりません。私たちは兄弟たちの「番人」(創世4・9参照)なのですから。

八月十四日、アメリカ・コロラド州デンバーで開かれた「世界若者の日」の集いで、教皇様は世界各地から集まった若者の前に、生命の大切さとそれを庄殺する現代社会の悪についてお話しになった。

心ある若者は、このような状況、特に個人の選択から生じる道徳的な過ちに対し、反旗をひるがえしはしないのでしょうか? 人間の尊厳に反し、神の似姿を損なうような態度や行いに対して多くの人が反対もしないのになぜでしょうか? 罪や悪を安易に受け入れることが、個人と人間性にとってどれほど致命的な危険をはらんでいるかを教えるのが正常な良心の仕事です。しかし、いつもそうとは限りません。良心自

体が、善悪を識別する力を失っているのでしょうか。

技術文明が人々の欲望に合わせた物事を作り変えるために利用され、事物の法則やメカニズムを探り支配する社会では、良心と良心の要求までも操作される恐れがあります。普遍的な真の価値というものを持たない文化には、絶対的なものは存在しません。そこでは、客観的な善や悪など問題にならない、ということになってしまします。善が意味を持つのは、ある特定の時に喜ばしいか、役に立つものである場合です。悪とは、私たちの自分本位な望みに対立するもの全てです。一人ひとりが自分だけの価値体系を築くことができる、というわけです。

皆さん、このような偽りの道徳が広まっても、受け入れられてはなりません。良心を押しつぶしてはなりません。良心は人間の最も奥深い中核、聖所であって、そこでは人間はただ一人、神と共にあるのです。「人間は良心の奥底に法を見出す。この法は人間が自らに課したものでなく、人間が従わねばならないものである。」(現代世界憲章、16番)

その法は人間の定めた外的なものではなく、悪しき欲望と罪の畏から自らを解き放てと呼びかける神の声であり、善と真理を探し求めるよう、私たちを促しています。存在の奥底で神の声を聞き、その声に従って行動しない限り、皆さんの熱望する自由は手に入らない

でしょう。イエズスの言葉どおり、「真理はあなたたちを自由な者とす」(ヨハネ8・32参照)のです。真理は各個人の想像の産物ではありません。神は真理を知るため知性と、道徳的な善を実行するため意志をお与えになったのです。私たちに善悪の判断ができるよう、また善を選び、悪を避けることができるよう、良心の光をお与えになりました。道徳的な真理は客観性を備えており、正しく形成された良心にはそれがわかる

### 世界若者の日に寄せて

## キリストの答え

★ 「私は命を、豊かな命を与えるために来た。」(ヨハネ10・10)

キリストのこの言葉は、間もなく開かれるデンバーでの世界若者の集いに向けて、私たちの考察の鍵となるものです。

良き牧者の唇に上ったこの言葉は、ご自分と私たちとの関係をやさしく、親密な言葉で語りつつ、羊の安全よりも自らの利害を優先する「雇い人」の牧者に気をつけよと言っています。良き牧者は愛する者たちのために自分の命を捨て、命の賜を与えます。「さらに豊かに」お与えになるのです。命とは何でしょうか? 重大な問いですが、現在しばしば等閑に

のです。けれども良心自体が損なわれてしまっていたら、光であるべき良心が、もはや光の用をなさなければ、道徳の暗闇をどうやって克服できましょう? 「体の明かりは目である。目がよければ全身が明るい。目が悪ければ全身が闇の中にいる。あなたの内の光が闇なら、その闇はどんなに暗かろう。」(マテオ6・22・23)とはイエズスの言葉です。しかし、こうも言われました。「私は世の光であ

る。私に従う人は闇の中を歩かず、命の光を持つであろう。」(ヨハネ8・12) キリストに言うなら良心は光を取り戻し、正しく機能するようになり、皆さんは世の光、地の塩(マテオ5・13参照)となることでしょう。

良心を再生させるものは次の二つです。まず、神についての真理を含めて確か客観的な真理を求める努力。そして、生命の言葉を有する唯一の御者、イエズス・キリストへの信仰の光です。(…)

付されています。何と多くの若者が、与えられた人生を精一杯生きるための確かな理由を見出せず、手足の力を奪うような懷疑主義に落ち込んでいることでしょう。

この問い、現代の抱える難問に対し、キリストは抽象理論を用いた回答を与えるのではなく、自己自身を差し出されます。「労苦する人、重荷を負う人は、すべて私のもとにくるがよい。私はあなたたちを休ませよう。」(マテオ11・28) キリストは愛に動かされて私たちと同じ者、人類の「道、真理、命」(ヨハネ14・6参照)となられたのです。

★ キリストとの出会いは、人間の命を「変容」させま

「私にとって、生きるのはキリストである」(フィリッピ1・21)と使徒パウロは叫びました。全てが変わり、全てが以前にまして美しくなります。キリスト信者は、肉となられたみことばのしるしを読み取るがゆえに、命を深く信頼しています。自然も肉体の生命も、人間の価値も、社会、科学、テクノロジーの中で生命も、全てが賜です。悲しいかな、罪が全てをくつがえし、墮落させ、この世を神の計画からそれ、利己主義と暴力、戦争と自然破壊、不正を引き起し、人間の尊厳を踏みにじっています。

けれども神の愛の贖いの力は罪よりも強いのです。これこそ「満ちあふれる命」の賜、罪の深淵から人類を救いだし、三位一体の生命との親しい交わりに導く神との親子関係という賜です。(…)

(ローマ、聖ペトロ広場にて、お告げの祈りの時間に。八・八)

セイドーの教理出版物がカセットテープになっています。(各巻定価二、二〇〇円、送料三〇〇円)

「祈り方」「神の現存」(F・ルナ著、新田壯一郎訳)「聖性を目指して」「マリアを通してイエズスへ」(J・エスクリバー著) 各60分カセット一巻

「十字架の道行」(J・エスクリバー著) 70分カセット一巻

※お問い合わせ・お申し込みは精道教育促進協会まで。

# 説教・講話・書簡等の抄訳

## 司教は使徒の後継者

教会シリーズ 16

使徒たちが後継者を任命したのは聖霊の導きの下に宣教の使命を継承し、完成するためでした。

**1** 使徒行録と書簡の記述が第二バチカン公会議の教会憲章に見られます。すなわち使徒たちは「役務の上で種々の協力者を持っていた」(20番)のです。実際、キリスト信者の共同体が聖霊降臨の日以後、急速に形成され、広がり始めるにつれて使徒たちの共同体は卓越した存在になりました。特に、エルサレムの共同体の中で「柱として著名なヤコボとケファとヨハネ」(ガラツィア2・9)と、聖パウロが証言している人々のグループがそうでした。ここにはイエズスが使徒の頭、教会の最高の牧者と定められたベトロ、主に愛された使徒ヨハネ、そして「主の兄弟」でエルサレム教会の頭と認められたヤコボがいました。

ババという名の代表をアンテイオキアに送りました。(使徒11・22)使徒行録にはパウロ(聖パウロ)のことも記されています。パウロが回心と第一次宣教旅行の後で、バルナバ(この人には「使徒」の名も与えられました。使徒行録14・14参照)と共に、教会權威の中心であるエルサレムへ使徒たちと協議するために出向いたことも、使徒行録に記されています。同時に、パウロはユダヤに住む兄弟たちに物的援助をもたらしました。(11・29参照)アンテイオキアの教会には、バルナバやパウロの他に「黒とあだ名のあるシメオン、キレネ人のルチオ、マナヘンなどの預言者や教師がいました。」(13・1)使徒たちが「二人に按手してから」(13・2・3参照)バルナバとパウロはこの地から、宣教旅行に旅立ったのです。この旅行以後、パウロはパウロと呼ばれるようになりまし

た。(13・9参照)さらに、教会共同体が増え、いくつにつれて「各教会に長老を立てた」(14・23)ことがわかります。これら長老の責任については、パウロに任命されてそれぞれ共同体の頭となったティトとティモテオに送ら

れた司牧書簡の中で、詳細に示されています。(ティト1・5、Iティモテオ5・17参照)

使徒たちは後継者を指名する

エルサレムの公会議のあと、使徒たちはバルナバとパウロと共に、もう二人の指導者をアンテイオキアに送りました。それは「兄弟たちの主立った人物で」(15・22)バルサバといわれるユダと、シラでした。パウロの書簡には、ティトとティモテオ以外の「協力者」や「同伴者」のことも述べられています。(Iテサロニケ1・1、IIコリント1・19、ローマ16・1、3・5参照)

**2** ある時点から、教会では使徒たちの後継者として新しい指導者が必要になりました。これに関して第二バチカン公会議は、使徒たちは「自分たちにゆだねられた使命が自分たちの死後にも続けられるように、その直接の

協力者たちに、いわば遺言の形で、自分たちによって始められた仕事を完成し、堅固にする任務を課し、神の教会を牧するため聖霊が彼らを群の中に置いたその群全体に気を配るよう、彼らに託した。(使徒行録20・28参照)そこで使徒たちはこのような人々を任命し、なお、この人が死去したときには、その役務を試練を乗り越えた他の人々が受け継ぐように命じた。(ローマの聖クレメンチス「コリント人への書簡」)(教会憲章20番)と述べています。

この継承のことは、聖クレメンチス、聖イレネウスとテルトゥリアヌスのような初代の聖書外のキリスト教著述家も証言しており、世にわたり伝達される真の使徒伝承の礎となるものです。第二バチカン公会議によると、「このように、聖イレネウスが証言しているとおり、使徒たちから司教に任命された人々、およびわれわれの時



# 不変の教え

な役員、つまり、キリストの言葉と秘義を自分たちの直接の知識に基づいて証言し、伝えること、そしてエルサレムに教会を創設するという役割を持ったことは事実です。しかし同時に、使徒たちは教会の成長のために、権威をもって教えることと司牧的指導という使命も受けていました。イエズスの意図によれば、この使命は、普遍的な福音宣教の事業を完成するために後継者が引き継ぐことができませんし、また引き継がなければならぬものなのです。この第二の意味で、使徒たちには協力者がいましたし、後には後継者もいたわけです。第二バチカン公会議はこのことを何度も述べています。(教令憲章18、20、22番)

「聖なる教会会議は、司教が教会の牧者として、神の制定によって使徒の位置を継承した者であり、彼らに聞く人はキリストに聞き、彼らをさげすむ人はキリストと、キリストを派遣した方をさげすむ者である(ルカ10・16参照)と教える。」(教令憲章20番)

司教は牧者キリストを代表する

## 弱者に対する態度で 偉大さがわかる

社会は道徳の理想を  
弱者に植えつけるべき

4 司教たちは、使徒たちにゆだねられた司牧の使命を全うし、この使命に伴う全ての権能を保持します。さらに、使徒たちのように、使命を果すに当っては協力者の助けを得ているのです。教会憲章にこうあります。「助力者である司祭や助祭とともに、共同体に奉仕する役割を受けた司教は、神の代理者として群の上に立ち、教理の師、聖なる祭儀の司祭、統治の役務者として、群の牧者である。(アンチオケの聖イグナチオ、フィラデルフィア人への書簡1・1参照)」(教会憲章20番) 第二バチカン公会議は、司教たちの使徒継承を強調して、この継承は神の制定であると述べています。再び教会憲章に戻ると、

(…)世界中の子供たちと若者の幸福は、公的な責任を負う人々全てが重大な関心を持つべきこととがらです。私は世界各地の教会を司牧訪問しましたが、ほぼ世界的な状況として、若者たちが困難な状態の中で育ち、生き残っている有様を見てたいへん心を痛めました。自然災害、飢餓、伝染病、政治や経済上の危機、戦争の惨禍に見舞われる人々の何と多いことでしょうか。物質的には最小限の困難が生じています。その最たるものが家庭の価値と安定性の崩壊です。開発途上国では、深刻な道徳上の危機が多く、若者の生き方に悪影響を及ぼし、時には希望を失わせ、その場限りの楽しみ

この神の定めによって、司教たちはキリストを代表する者となり、司教に聞く人は、とりもなおさずキリストに聞くことになるのです。ですから、ベトロの後継者だけが牧者キリストを代表する唯一の人ではありません。使徒たちの他の後継者たちも代表するのです。実際、公会議はこう教えています。「大司祭である主イエズ

を求めめる習慣を植えつけ、あてもなくさまよわせています。それでも周囲の世界に深い関心を持ち、他人のために進んでできる限りのことをしようとする若者、生命の超越的な意味に目をむける若者たちがどこにもいれるものです。でもどのようにして彼らを助ければよいのでしょうか。社会が道徳の高い理想を植え込むことによつてのみ、若者たちは自由で知性ある人間として育ち、公共の善に対する確固とした責任感を身につけ、他者と共に強固な道徳性を備えた共同体や国家を築き上げることができます。アメリカはこのような理想の上に建てられたのであり、知性と意志にあふれたアメリカ人は新たな熱意をもって、この国を建国し、育てた理想を蘇らせるために身を捧げることによ

ス・キリストは、司祭たちに補佐されている司教の中に、信する者たちのあいだに現存する。」(教会憲章21番) イエズスの言葉、「あなたたちの言うことを聞く人は私のいうことを聞く人であり」(ルカ10・16)は、公会議でも引用されていますが、もつと広く適用することができます。それは、この言葉が七十二人の弟子たちに向う。これらの理想は独立宣言や憲法、権利章典に記されており、今なおアメリカ人の間で幅広い合意を得ています。こうした理想があればこそ、世界中の人々がアメリカへの希望と尊敬を抱いてきたのです。

全てのアメリカ人に呼びかけたことがあります。「来ることがよい、話し合おう。」(イザヤ1・18参照) 真理に基づく価値体系を持たぬ教育は、若者を道徳の混乱状態に陥れ、人格をあやふやにし、操り人形のような人間にしてしまします。いかなる強国と言えども、この不可欠の善を子供たちから奪うなら、滅びに至ることでしょう。人間一人ひとりの尊厳と価値を重んじること、道義心、責任感、理解力、思いやり、他者との連帯…これらは家庭や学校で、またメディアを通じて与えられなければ、身につけることはできません。

正義と自由を求めらるなら、  
命を守るろう!

かつて言われたものだからです。なお使徒行録でわかることは、このカテケジスの最初の方で引用しましたが、大勢の協力者が使徒たちの周りに集まって、聖職位階は急速に分化し、長老たち(司教とその協力者)と助祭たち(司教を助ける普通の信者からの援助もあつたのです。(九二・七・八)

アメリカでは、伝統的に個人と人間の尊厳、人権が重んじられます。一九八七年に合衆国を訪問した時、私はそれを知って嬉しく思いました。前回表明した希望をここでもう一度述べたいと思います。「アメリカは美しく、多くの点で恵まれています。最も美しく、恵まれたものは人間の内にあります。男、女、子供、一人ひとりの中に、全ての移民、土着の人々の中に…。皆さんの偉大さの試金石となるのは、人間をどのように扱おうか、特に、最も弱い立場にある人、寄る辺なき人々にどのように接するか、ということとです。アメリカ最良の伝統と呼べるのは、自らを守ることができない人々の尊重です。全ての人のために等しく正義を願うなら、真の自由と永久の平和を願うなら、命を擁護しましょう! 今日皆さんの掲げる理想が意義を持つかどうかは、いかに命の権利を保障するか、人間を守るにかかっているのです。」(…) (デンバーの空港にて。八・十二)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教 書簡、講話等を解説したものに  
そのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料別  
一年千九百円 送料六百円 干部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替  
神戸  
3-72393